

地理的基本概念からみる地理カリキュラムにおける 2つの類型：香港・英国・米国・シンガポール・我が国の比較

著者名(日)	吉田 剛
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	47
ページ	71-83
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000218/

地理的基本概念からみる地理カリキュラムにおける2つの類型

——香港・英国・米国・シンガポール・我が国の比較——

* 吉 田 剛

Two tapes of National Geography Curriculum, in Terms of Geographical Basic Concepts ;
Comparing H.K, U.K, U.S, Singapore, and Japan

YOSHIDA Tsuyoshi

要 旨

本稿は、香港中学校地理カリキュラム2010年版における地理的基本概念の検討を行い、加えてイギリス地理ナショナルカリキュラム2007年版、アメリカ合衆国地理ナショナルスタンダード、シンガポール地理シラバス2006年版そして我が国平成20年版学習指導要領地理的分野にみられる地理的基本概念に関わる内容の比較を行い、地理カリキュラムにみられる地理的基本概念の特徴について検討した。その結果、地理カリキュラムにおける内容知と方法知となる三つの地理的基本概念の役割から2つの類型（TD型とBU型）が見いだせた。付随して、アメリカ合衆国地理ナショナルスタンダードにおける地理的パースペクティブは方法知として、「空間」「生態」などの地理的基本概念の概念的な知識を活用する手続き的知識となり、我が国の地理の見方・考え方に相当することや、地理的基本概念の役割に基づく識別方法は地理カリキュラムや地理学習をみる有力な分析ツールに成り得ることが考えられた。その他、地理的基本概念の明確化に関する議論の深化によって、我が国の地理教育研究において地理カリキュラムや地理学習のパラダイム転換をもたらす可能性があることを示唆した。我が国にとって、内容知と方法知における地理的基本概念の明確化とその授業構成の組織性を高める必要性についても言及した。

Key words：内容知と方法知

地理的基本概念の役割

トップダウン型（TD型）とボトムアップ型（BU型）

「アメリカ合衆国地理ナショナルスタンダードの波及」

1. はじめに

平成20年版中学校学習指導要領社会科地理的分野（以後、平成20年版）¹の主な特徴には、平成10年版²の地域規模に応じた調査の学習から地誌的な学習に移り変わった点があげられる。この動きについて、例えば吉田（2011a）は、地理的な見方や考え方（以後、地理の見方・考え方）の育成への軽視に繋がってはならず、

地誌的な学習の増加分の学ばせ方やこれまでの問題点を追究し、新たな地誌的な学習に活かしていく必要があると論じている。

主要な諸外国をみると、アメリカ合衆国地理ナショナルスタンダード1994年版（以後、米スタンダード）やイギリス地理ナショナルカリキュラム2007年版（以後、英2007年版）³では、地理的基本概念の理解や地理的技能の育成を重視する主題的・系統地理的な学習に

* 宮城教育大学社会科教育講座

なっている。シンガポールの中学校低学年地理カリキュラム2006年版（以後、シンガ2006年版）⁴では、吉田（2010）によると、国家的課題に繋がる内容構成や単元末にある自国の事例学習、その探究や価値判断の組み込みと価値態度項目の内容から「国民教育」としての地理教育の意味合いが強められている。この場合は、主題的・系統地理的な学習の構成の基に国家的事情が強く反映されている。

各国の教育の環境、その水準や高度化などによって地理カリキュラムの構造的性は異なる。また地理だけの議論に留まらず、教育政策との関わりにも議論は及び、国際競争をにらむ学力向上や諸国間の地域性などによる地理カリキュラムへの影響も考えられる。先進国か発展途上国か、アジアかヨーロッパかといった社会的環境などの分析によって、各国地理カリキュラムの特徴やそれらに共通する地理教育の原理や関連などを明らかにし、その中で我が国の課題を見直す機会も得られる。

そのような相対化には、地理カリキュラムの基礎・基本をなす本質的な中心概念、つまり地理的基本概念に焦点を当てて検討する意義がある。地理的基本概念は、学習内容を構成する地理カリキュラムの基礎となり、学習内容を考え、認識する際に活用される基本となるからである。ただし草原（2006）のように、子どもの疑問を出発点に地域を社会諸科学全般から総合的に探っていく場合、地理的基本概念は、他の社会諸科学の基本概念と混在・複合しながら扱われる側面が強まるため、やや不透明となり、地理カリキュラムそして地理学習におけるその重みは薄れてしまう。しかし地理カリキュラムにおける地理的基本概念の検討は、世界的な社会系教科の動向や、地理的基本概念を含む地理的な見方や考え方を示してきた我が国の社会科地理的分野において重要である。例えば、平成20年版の

目標の解説部分にみられる地理的見方・考え方には、例えば、「空間」「景観」「分布」「立地」「環境」「地域」などの地理的基本概念が含まれている⁵。

そこで本稿は、まず香港の中学校地理カリキュラム2010年版⁶（以後、香港2010年版）における地理的基本概念の検討を行い、香港に歴史的に繋がりのある英2007年版、そして世界的に影響を持つ米スタンダード、さらに香港と同規模のシンガ2006年版、最後に平成20年版にみられる地理的基本概念に関わる内容との比較を重ねて行い、中学校段階の地理カリキュラムにみられる地理的基本概念の特徴について検討する。そしてその成果を基に、我が国地理カリキュラムの改善などに向けて若干言及する。

香港2010年版を最初に検討する理由は、他国と比べて最新の年版となり、吉田（2012）を参考にすると、影響力を持つ米英地理カリキュラムの特徴が洗練されたかたちで反映され、またアジアと欧米の歴史・文化が絡み合う地域で各国地理カリキュラムをみる上で中庸性が窺えるからである。ただし、香港地理カリキュラムに関する近年の先行研究は、その概要を説明する吉田（2012）以外、ほとんどみられない。その中では、英2007年版と米スタンダードにみられる地理的基本概念に関わる内容の大まかな対比や、シンガ2006年版のシティズンシップ育成との対比などがなされているが、概要説明に重きがおかれ、本稿で着目する地理的基本概念は十分に掘り下げられて検討されていない。

本稿の方法・手順には次の三つをとる。

- ① 香港2010年版の概要に関する吉田（2012）の成果に加えて、各単元の知識目標の内容項目から地理的基本概念の意義について追究する。その際に、香港2010年版の特徴を一層明確に把握するために、旧カリキュラム⁷（以後、香港1998年版）からの動向も検討に加える。

1 文部科学省（2008）：『中学校学習指導要領解説—社会編—』日本文教出版，161p.

2 文部科学省（1999）：『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—社会編—』大阪書籍，208p.

3 Geography Education Standards Project (ed.) (1994) : *Geography for life : National Geography Standards 1994*, National Geographic Society, Washington, 272p. Qualifications and Curriculum Authority (2007) : *Geography; Programme of study for key stage 3 and attainment target* (www.qca.org.uk/curriculum), pp.101-109.

4 Curriculum Planning and Development Division Ministry of Education (2006) : GEOGRAPHY SYLLABUS Lower Secondary (http://www.moe.gov.sg), pp.1-44. 本シラバスの各単元は、内容知となる「内容」、内容知に従属する方法知となる「学習成果」、内容知の中心となる「主要概念」、そして「価値態度」からなる。

5 平成20年版の①地理的な見方の基本、②地理的な考え方の基本、③④⑤地理的な考え方を構成する主要な柱より、①から「空間」が、②③④から「景観」「分布」「立地」「環境」「地域」などが、とくに⑤から「地域」に含まれる課題や未来などが見出せる。

6 The Curriculum Development Council Recommended for Use in Schools by The Education Bureau HKSAR (2010) : *Geography Curriculum Guide (Secondary1-3)* (www.edb.gov.hk), pp.1-167.

1998年版		2010年版
I 地理的な探究の仕方を学び、探究を容易にする概念を理解する。	1 何、どこ、なぜ、どのように変わりどのように変化すべきかなどの地理的問いを求める。	●知識理解 (a) 空間、場所そして環境、特に場所の空間的配列や人間と環境の相互作用に関する知識と理解を発達させる。
	2 地理的傾向の様々なタイプを解釈するために、地図、写真、記事などの様々な情報源から空間的な情報を収集し選り整理する。	
	3 様々な方法で情報を表現する。	
	4 位置、空間の相互作用、地域、知覚など、様々なスケールから地表面の特徴・分布の説明を手助けする空間的概念を理解する。	
II 香港、中国、残りの世界における景観の形成過程を知り理解する。	5 生徒の知覚の周辺環境やそれらを形作る方について知り理解する。	(b) 地理的方法によって考え、探究させる。
	6 香港、中国、残りの世界の人文的自然的環境の主な特徴の知識を獲得する。	●地理的技能
	7 香港、中国、残りの世界の関係の理解を発達させる。	(c) 発展的な学習や生活のために地理的技能や一般的な技能を発達させる。
	8 地球規模の主な問題を知り理解する。	●価値態度
III 持続的な環境を創造し維持するという行動に対する協力的な価値や態度を発達させ、地球上の人類間の協力と理解を促進し、私たちの社会と国家への帰属意識を育む。	9 価値技能を発達させる。	関連 (d) 自分たちの都市・国・世界の改善に向けた行動や、人間社会や自然環境の持続発展への貢献をいとわない、知識を持ち、責任感ある市民になるようにさせる。
	10 環境のもろさに気づき、持続的な開発を奨励する必要性を正しく理解する。	
	11 他の人々や生活様式への理解と敬意を高める。	
	12 社会や国家の向上のための知識利用の気持ちを高める。	
	13 よりよい環境を手助けする行動にゆだねる。	

波線部は地理的基本概念に関する内容

第1図 香港中学校地理シラバス1998年版(旧版)と2010年版(新版)の目標(筆者作成)

- ② ①の結果に重ねて、英2007年版、米スタンダード、シンガ2006年版にみられる地理的基本概念に関わる内容を対比させ、さらに平成20年版下の地理的見方・考え方にみられる地理的基本概念の検討も加え、各国の特徴や相関を考察しながら地理的基本概念の役割について総合的に検討する。ただし近年、改訂された英2007年版も香港の場合と同様に、旧カリキュラム⁸(以後、英1999年版)からの動向も踏まえて検討する。また総合的な検討の際には、吉田(2011a)による地理カリキュラムにおける内容知と方法知の理論的な枠組みを援用し、地理的基本概念の役割を類型化しながら考察する。
- ③ ②の結果より、我が国の地理カリキュラムや地理の授業展開上の課題について若干言及する。
- 吉田(2011a)による内容知と方法知の枠組みは、次の(1)~(3)の捉え方とし、その基に考察を進める。
- (1) 内容知は学ぶ対象となる地理的事象やそれらの因果関係などの意味とする。内容知は①地理的事象(地表面における諸事象そのもの)、②地理的事象の因果関係、③地理的事象の因果関係の中から見出された市民的資質に繋がる社会的課題・意義、の三層に構

造化される。また地理カリキュラムのねらう地理的認識の形成には主に①②が、市民的資質の育成には主に①②から得られる③が、それぞれ方法知を通して関わる。

- (2) 方法知は思考・作業の方法となる、地理的基本概念の概念的知識を活用する地理的見方・考え方(思考技能)と、地理的技能(探究・具体的作業技能)とし、内容知を学ぶ際に活用され、その経験が増えるに連れてその活用性が高まっていくものとする。ただし本稿では議論を明瞭にするために、地理的技能に特段、着目しない。
- (3) 双方の知のバランスは、内容知の①②の量と質が地誌的な学習や主題的・系統地理的な学習などの内容構成の仕方を通じて、内容知の①②に、方法知となる地理的基本概念の概念的知識をどの程度の質的、時間的に活用させるかが問題とされる。

2. 香港中学校地理カリキュラムにおける地理的基本概念の意義

吉田(2012)によれば、香港2010年版は知識・理解、

7 The Curriculum Development Council Recommended for Use in Schools by The Education Department Hong Kong (1998) : *Geography Secondary 1-3* (www.edb.gov.hk), pp.1-80.

8 DfEE (Department for Education and Employment) and QCA (Qualifications and Curriculum Authority) (1999) : *Geography : the National Curriculum for England. Key Stage 1-3*, HMSO, London, 44p.

第1表 香港中学校地理カリキュラム2010年版の単元の内容構成と1998年版からの変容（筆者作成）

部門	地域規模*	地理的基本概念	地域的課題	
			必修単元	選択単元（各部門で一つ選択）
A 主に 香港	L ↓ N ↓ R ↓ G	「空間」 「場所」	賢い都市空間の利用－持続發展的な都市環境を維持可能か（イ） ■ N: 広州・天津、R: ソウル、G: ヘルシンキ	観光－友人か敵対者か（ア） ■ N: マカオ（歴史館）、R: タイ（島と浜辺）、G: ブラジル（アマゾン）
			自然の危険－他より良く整えられるか（イ） ■ N: 台湾・四川・甘肅、R: フィリピン・インドネシア・インド、G: アメリカ合衆国・ニュージーランド・中央アメリカ	気候変動、環境変化（ウ） ■ N: 中国（暴風雪）、R: ツバル（海面上昇）、G: 極地方（氷河の溶解）
B 主に 中国	N ↓ R ↓ G	「人間環境の相互作用」 「地域」	食糧問題－私たちは食べていけるか（ウ） ■ R: 北朝鮮・カンボジア、G: サヘル	人口問題－ちょうど良い人数は（ア） ■ R: 日本・インド、G: ドイツ・ナイジェリア
			水の心配－多すぎる、少なすぎる（ア） ■ R: シンガポール・バングラディシュ、G: イギリス	砂漠を弱める－砂漠化と砂嵐に抵抗する長く続く戦い（ア） ■ R: オーストラリア、G: サハラ
C 主に アジア 太平洋	R ↓ G	「地球の相互依存関係」 「持続発展」	製造業の地球的な移動－機会と脅威（イ） ■ G: 広東・イギリス・五大湖	疾病地理－広がる危険に直面する（エ） ■ G: インフルエンザ（例に鳥、豚）・エイズ・結核
			エネルギーの奪い合い（ウ） ■ G: イギリス（風力）・中国（水力）・ブラジル（バイオ）	不安な大洋（ア） ■ G: 南シナ海・北海・地中海

香港教育局資料（2010年6月）および吉田（2012）より一部改変して筆者作成。下記は表中記号の凡例。
* L: 香港、N: 中国（国内）、R: アジア太平洋（域内）、G: 地球。
（ア）: 1998年版（旧版）単元内容をほぼ維持。（イ）: 複数の旧版単元内容を結合。（ウ）: 旧版単元内容一部を焦点化・新規拡充。
（エ）: 全面的に新規の単元内容。■: 各単元で取り上げられている事例地域

地理的思考、地理的技能、価値と態度の四目標が端的に示されている（第1図参照）。また第1表より、地理カリキュラム全単元で地域的課題を中心に多重な地域規模（香港、中国、アジア太平洋、地球）で事例地域が取り上げられている。そのため、必然的に発問は問題解決的な過程を通じて構造化され、その中で基礎・基本的な知識と技能を体得させていく手法をとる。なお、事例地域の取り上げによる知識不足や、学問地理と日常生活とのバランスに配慮したチェック用の学習要素となる知識理解、技能、価値と態度の細項目も列挙されている。カリキュラムの進め方は、三年間で六単元必修と三単元選択となり、原則的に香港を基に大きな地域規模の事例地域に繋げるように、A部門から始まり、中国を基にしたB部門、地球規模のC部門へと進む。各単元の詳細は、発問（四つ程度の中心発問と従属する二から三つ程度の補助発問）、事例地域、知識項目、技能項目、価値態度項目によって構成され、必修単元は概ね概念的、選択単元は特論的・発展的な内容の扱いとなっている。各単元の事例地域は全単元からみると、全世界の空間認識への配慮が窺え、バランス良く取り上げられている。

香港2010年版の単元内容は、香港1988年版からみると、A・B部門でその多くが継承されているが、C部門では**病気の地理**が新たに加わり、多くが再構成されている。地理的基本概念については、全単元に位置付けられているが、それらの内容説明は得られない。しかしそれらの位置付けは、一般的な概念的意味合いからみれば、A～C部門の各単元内容における地域規模や環境拡大的構成の特徴などに概ね合致している。

続いて、第2表に例示する、全単元の知識目標の項目内容から、そのような地理的基本概念について検討する。その前に、吉田（2012）による「地理的基本概念の三段階」(I「地理的事象の把握（地理的思考の土台づくり）」、II「地理的事象の因果関係などの意味に関わる思考」、III「価値・態度形成に繋がる社会的・地域的課題の解決に関わる価値判断や意思決定」、以後、I II IIIは「地理的基本概念の三段階」と表記）からみると、Iに「空間」「場所」、IIに「人間環境の相互作用」「地域」、IIIに「地球の相互依存関係」「持続発展」が概ね対応していることを踏まえ、考察していく。

A部門の単元では、概ね系統地理的な内容に基づく主題的な学習となり、香港の身近な地域の調査とその

第2表 A・B・C各部門における単元の知識項目の内容例（筆者作成）

単元	知識内容の項目
<p>賢い都市空間の利用</p> <p>A部門</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●都市の土地利用の主なタイプ（CBDと他の商業的土地利用、高収入低収入者の居住のための土地利用、工業的土地利用、輸送や娯楽の土地利用、機関の土地利用） ●都市の土地利用の傾向に影響を与える要因 ●香港の都市土地利用の傾向と世界の三都市の概観（いくつかの特定の土地利用タイプの特徴／香港と共通しない傾向、例えば港区域、既存の商業施設、不法占拠地域） ●香港の都市問題（交通渋滞、汚染、居住、都市衰退を含む）：原因、特徴、解決策 ●広州／天津と香港の都市問題の比較 ●持続発展的な都市開発と持続発展都市の特徴 ●持続発展的な都市開発に向けて進展する広州（緑の社会）／天津（エコ都市）、ソウル、ヘルシンキの学習
<p>食糧問題</p> <p>B部門</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●中国（北西、北と北東、南）の主な農業地域の分布とその分布に影響する要因 ●中国と世界の農業の主なタイプ（例えば、集約的稲作、粗放的な小麦栽培、牧畜業、園芸農業、近郊農業、乾燥農業、混合農業） ●中国の人口増加傾向 ●中国の主な農業問題、例えば、耕作地の減少、土壌浸食、水不足、環境汚染、自然の危険、低レベルの科学技術と機械化、食糧供給の影響 ●科学的農法と農業生産の向上 ●中国の農業問題の他の解決策、例えば、土壌保全、よりよい土地利用の扱い、農業の特殊化 ●貧国の食糧問題の原因－異常気象、自然災害、水不足、貧弱な政治、不安な社会状況、戦争、民族紛争 ●科学的農法、農業教育、人口統制、国際援助による貧国の食糧問題の解決策
<p>エネルギーの奪い合い</p> <p>C部門</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●世界の主なエネルギー資源のタイプ：再生可能なエネルギーと再生不可能なエネルギー ●地球的なエネルギー生産や消費のパターンそしてそれによって誘引された経済的・政治的なぶつかり合いをに関連するもの。 ●再生不可能なエネルギーの利用の費用と利点、とくに化石燃料と薪の利用において ●再生可能エネルギーの利点と限界 ●エネルギー問題の先進国と発展途上国との間の主な共通性と特殊性 ●原子力を利用する賛否と将来のエネルギー供給の役割の増加 ●世界のエネルギー問題の地方、国家そして地球的な解決方法。エネルギー需要を減少させ、エネルギーのより効果的な利用、新しいエネルギー節約・再生可能なエネルギーテクノロジー・新しい建築デザインと技術の開発、より効果的なエネルギーシステムの採用（例えば大量輸送システム） ●エネルギーを節約し保全するための個々人の行動。例えば、効果的にエネルギーの利用を減少させ、そして生活様式や消費パターンを変化させること。

発展的学習に中国や世界の各地域の取り上げられ、香港を基に中国から地球といった幅の広い地域規模における地理的事象が対象となる。そのために、それら全てを捉えられる抽象度の高い「空間」「場所」が対応し、それらには、賢い都市空間の利用・自然の危険・観光・気候変動／環境変化の各単元で地理的事象の把握や地理的思考のための土台づくりとしての役割が与えられている。

B部門の単元でも系統地理的な内容を中心に中国の主題的な学習が基となり、世界各地の事例地域に繋がられている。B部門では、「空間」「場所」より高次な関係性を意味する「人間環境の相互作用」「地域」が対応し、「人間環境の相互作用」は、人間と環境との関わりなどの内容が考えられ、水の心配・砂漠を弱めるの単元に関わる。また「地域」は、地域性などの内容が考えられ、中国各地域の農業地域の分布などを取り上げる食糧問題や、先進国や発展途上国の人口などを取り上げる人口問題の単元に関わる。

C部門の単元では、グローバルな企業展開やその

他、地球環境問題などが取り上げられ、地球的課題やシティズンシップ育成などに関連しやすい「地球的相互依存関係」「持続発展」が対応する。「地球的相互依存関係」は、先進国と発展途上国における製造業の地球的移動による相互補完などを取り上げる製造業の地球的な移動の単元や、世界における移動に伴う伝染病の拡大などを取り上げる病気の地理の単元に関わる。「持続発展」は、世界的なエネルギー問題の地球的な解決方法などを取り上げるエネルギーの奪い合いの単元や、持続発展的な大洋資源の開発や管理方法などを取り上げる不安な大洋の単元に関わる。

以上によって、香港2010年版は地理的認識の形成から市民的資質の育成へ、「空間」「場所」→「人間環境の相互作用」「地域」→「地球的相互依存関係」「持続発展」と積み上がり、これらは、単元内容の具体、地域規模の特性、異なる地域規模の重なり合いなどから適切に関連付けられている。

ところで香港1998年版の目標は、第1図より、Iの方法知となる地理的技能・探究とそれに役立てられる

第3表 1998年版香港中学校地理シラバスの概要 (筆者作成)

学年	課題 / 問題 (内容領域)		推薦される事例地域	**
第一学年 香港*	都市環境での生活	どこにいるかをどのように知るのか? (地図技能)		9
		土地の奪い合い (都市土地利用)	香港	8
		私たちの街の問題に目を向ける (都市問題)	上海 / 香港 / 広州	8
		私たちの工場はどこに移動しているのか? (工業の位置)	中国南部	8
		街から出るか街に入るか? (都市化と郊外化)	USA / ブラジル	8
		休暇をどこで過ごすか? (休養と旅行)	東南アジア	9
第二学年 中国*	自然環境への人間の対応	気象と気候は重要か? (気象と気候)	中国	8
		土砂崩れ (起伏)	香港	7
		多すぎる水 (水循環と洪水)	中国 / バングラディッシュ	7
		広がる砂漠を抑える (乾燥環境と砂漠化)	中国 / サハラ	6
		不安定な地球 (プレートテクトニクス、地震、火山)	日本 / メキシコ	6
		間違った方法の農業か? (農業と技術)	中国 / オーストラリア	7
		多すぎる、少なすぎる (人口の分布と問題)	中国	9
第三学年 地球*	資源と開発	熱帯雨林を守る (自然植物)	南アメリカ / 東南アジア	9
		大洋における問題 (海洋資源)	アジア太平洋	9
		大気はどれほどきれいかわか? (大気汚染と酸性雨)	ヨーロッパ / 北アメリカ	8
		力となる資源の奪い合い (エネルギー)	中国	8
		工業の奇跡 (工業の発展)	日本	8
		豊かさと言しさ (発展と相互依存)		8

*中心に扱われる地域規模 **推薦される授業時数

地理的基本概念に関する知識、Ⅱの内容知となる自然・人文景観を基にした知識理解、ⅢのESDやグローバルシティズンシップなどに関わる価値態度の三つからなる。香港1998年版の地理的基本概念は、方法知となる目標Ⅰの4 (位置、空間的相互作用、地域など)で部分的に示されていたが、香港2010年版目標においては、それが内容知となる知識理解目標 (a) の中に移り、地理カリキュラムにおけるその立場を変化させている。ただし、その知識理解目標 (a) の細目 (a) では、「空間、場所、地域、人間環境、相互作用、地球的な依存関係、持続発展などの地理的基本概念の理解や、新たな状況や文脈での活用を通じて発達させる」と説明され、地理的基本概念の活用に関する方法知としての意味合いも一部に残されたままになっている。

第3表より、香港1998年版の単元内容を見ると、各単元は授業時数が示され、香港を中心とした第一学年では方法知となる地図技能を先頭に、香港の社会的問題の理解から中国や世界の各地へと、多重な地域規模の事例地域に繋がりが持たせられ、第二学年では中国を中心に自然・人文地理の構成に社会問題が組み込まれ、第三学年では地球的課題を考える構成をとり、香港2010年版と同様、地域規模で仕切る環境拡大的構成

に社会的課題が設定されている。さらに香港1998年版の各単元内の枠組みを資料より詳細にみると、各単元の内容構成に意思決定を求める論争問題や問題解決的な課題が組み込まれ、主題的・系統地理的なアプローチから、発問 (三から四つ程度の中心発問と従属する三から四つ程度の補助発問)、重点事項、概念、技能などの項目が連動し、それらは終末部の価値態度で一括される。香港2010年版では、1998年版の発問を伴う問題解決的な過程の基盤を残しながらも、1998年版の重点事項や概念の項目を新たに知識理解の項目に代えた上で地理的基本概念を組み入れ、カリキュラムの組織性を高めながら、単元内容を洗練化させてきている。

3. 主要な諸外国との比較

吉田 (2011b) も触れているが、第2図より、英1999年版では地理的基本概念 (key concepts) が示されていないが、「場所」「パターンとプロセス」「環境変容と持続可能な発展」などの知識理解項目の内容は、英2007年版で七つの地理的基本概念へと派生し、新たな構想性を生み出している。英2007年版でとくに新たに生み出された内容には、人文主義に関わる『場所』b項目

1999年版学習内容における知識理解		2007年版における地理的基本概念の内容		段階*
場所	a.既に何らかの学習をしている場所と環境の立地、ニュースに出る場所や環境、その他の特徴的な場所や環境の立地について。	a.実存する場所の自然的・人文的特徴を理解すること。	場所	I 地理的事象の把握(地理的思考の土台作り)
	b.場所に関するナショナル(国家規模)、インターナショナル(国家間規模)、グローバル(地球規模)について記述する。	b.場所の“地理的な想像力”を発達させること。	空間	
	c.その場所における特徴がより鮮明になってきた自然的・人文的特徴について記述し、説明する。	a.情報、人々、商品の流れが作り出す、場所間やネットワーク間の相互作用を理解すること。		
	d.どのようになぜ場所に変化が起きるのか、そのような変化から、様々な問題が生じているのか、説明する。	b.どこに場所や地形が立地し、なぜそこに存在しているか、またそれらが作り出すパターンや分布や、どのようになぜそれらは変化し、人々と関わっているのかを知ること。		
パターンとプロセス	e.どのように、場所と場所が相互依存しているのか(貿易、援助、海外旅行、酸性雨など)、説明し、グローバル・シティズンシップの思想・意義について調査する。	a.異なるスケールを正しく理解することーパーソナルやローカルからナショナル、またインターナショナルやグローバル規模など。	スケール	II 地理的事象の因果関係などの意味に関わる思考
	環境変容と持続可能な発展	b.地理的観念の理解を発達させるための、スケール間の繋がりを整理すること。	場所の相互依存	
a.場所間の社会的、経済的、環境的、政治的な結びつきを調査すること。				
b.全スケールにおける相互依存の重要性の変化について理解すること。		自然的・人文的プロセス		
環境変容と持続可能な発展	a.自然的・人文的な特徴のパターンを記述し、説明し、場所や環境の特質と関連させる。	a.自然地理的または人文地理的な世界が、場所や地形、社会を変化させている事象や機能の連続性について理解すること。	環境の相互作用と持続可能な開発	III 価値態度形成に繋がる社会的・地域的課題の解決に関わる価値判断や意思決定
	b.自然的・人文的なプロセスやそれらの場所や環境に与える影響を見出し、記述、説明する。	b.持続可能な開発と、その環境の相互作用や気候の変化に与える影響について調査すること。		
	a.環境変容(森林破壊、土壌浸食)やどのようにそれを違った方法で管理していくのか、認識する。	a.社会や経済の理解を特徴付けている、人々の間や場所間、環境間そして異なる文化間の違いや類似点を正しく理解すること。	文化の理解と多様性	
b.持続可能な発展の思想意義について調査し、それと人々や場所、環境、生活の関連を認識する。	b.どのように人々の価値観や態度が異なり、また社会や環境、経済、政治的問題に影響を及ぼし、それらの問題に対する彼ら自身の価値観や態度が形成されているのかを正しく理解すること。			

* 吉田(2012)による地理的基本概念の三段階の役割

第2図 イギリス地理ナショナルカリキュラム1999年版から2007年版地理的基本概念への流れと地理的基本概念の三段階の役割(筆者作成)

や、空間主義による物理空間の相互作用に関わる『空間』a項目、そして吉田(2012)も指摘するシティズンシップ教育に関わる『文化の理解と多様性』ab項目(後述)が確認できる。

『環境の相互作用と持続可能な開発』a項目は環境認識となり、b項目は持続発展教育に繋がる。『文化の理解と多様性』a項目は多様性認識となり、b項目は価値態度の育成に繋がる。これら二つの地理的基本概念は、認識の形成と資質の育成の二段階から構成されるが、市民的資質の育成を中心に位置付けられている。また、英2007年版の地理的基本概念は「地理的基本概念の三段」からみると、知識理解や技能に関する内容も一部に含まれるが概ね、前述の香港2010年版の地理的基本

概念と同様に、Iに『場所』『空間』『スケール』が、IIに『場所の相互依存』『自然的・人文的プロセス』が、IIIに持続発展教育やシティズンシップ教育に繋がる総合的な『環境の相互作用と持続可能な開発』『文化の理解と多様性』が各々相当する⁹。

香港2010年版では、初出した地理的基本概念の内容に説明がみられないが、香港教育が20世紀末までイギリス教育の影響を受けてきた歴史的背景や、イギリスのカリキュラム改訂のタイムラグを考慮すると、英2007年版の地理的基本概念の影響を受けていると推察できる。ただし、英2007年版の『スケール』に相当するものは見当たらない。香港1998年版と2010年版がともに単元を大きく地域規模に仕切り、具体的な単元内

9 ロンドン大学教育学院地理教育担当、John Morgan氏への聞き取り調査(2009年3月下旬)も参考にした。

第4表 アメリカ合衆国の地理ナショナル・スタンダードの構成および内容知と方法知—吉田 (2011a) より—

スタンダードの構成 Components (三つの相互関係による)		
教科内容 Subject matter : Distillation of essential knowledge, foundation for geograpy standards.	地理的スキル Skills ●	地理的パースペクティブ Perspective ●
六つのエレメント	①～⑩: スタンダード項目	
【空間の世界】 ●	①地図などの道具の使い方 (空間的情報の獲得・処理・報告のための)。②メンタルマップの使い方 (空間における人・場所・環境の組織化のための)。③空間的な分析の仕方 (地表面における人・場所・環境の空間的組織化)。	(1) 地理的な問いを発する (2) 地理情報を獲得する (3) 地理情報を組織化する
【場所と地域】 ■	④自然的・人文的特徴。⑤人間が理解するための地域。⑥知覚と地域・認識 (文化と経験による影響)。	(4) 地理情報を分析する (5) 地理的な問いに答える
【自然システム】 ■	⑦地形 (形成プロセス・パターン)。⑧生態システム (特徴・分布)。	
【人文システム】 ■	⑨人口 (特徴・分布・移動)。⑩文化モザイク (特徴・分布・複雑性)。⑪経済的相互依存 (パターン・ネットワーク)。⑫居住 (プロセス・パターン・機能)。⑬人間集団 (支配・配分・協力・紛争)。	
【環境と社会】 ■	⑭人間と自然 (人間活動の自然環境への働きかけ)。⑮自然と人文 (自然システムの人文システムへの影響)。⑯資源 (意味・利用・分布・重要性の変化)。	
【地理の実用】 ●	⑰過去の解釈。⑱現在の解釈と未来の設計。	

* [GEOGRAPHY FOR LIFE: NATIONAL GEOGRAPHY STANDARDS1994] (pp.30~59.) より筆者が訳したもの。
 * 表中の■は、スタンダード項目の内容が、学ぶ対象「名詞句、または主語+動詞+目的語」や、学ぶ対象の様態を尋ねる「How + 名詞句」の疑問形をとるため、「内容知」として解釈した。●は、「方法知」として解釈し、とくにエレメントにおいては、スタンダード項目の内容が、全て思考・作業の方法を尋ねる「How to (do) ~」の疑問形をとるため、解釈した。

容とともに様々な地域規模と連動させて学習させることによって、それが補われると考えるのか、影響力のある米スタンダードや五大テーマなどに『スケール』が重く取り上げられていないことを反映し、強く意識されていないと考えるのか、その理由は定かではない。しかし後述の議論にも繋がるが、後者の米スタンダードなどによる影響の方が考えやすい。

英2007年版の「範囲と内容」については、様々なスケールや異なる地域からの取り上げが指示されているが、その具体を確認できる中学校段階の教科書¹⁰をみると、大きくは個人、ローカル、ナショナルなどからグローバルへと環境拡大的構成をとる。ただし、香港2010年版のような一律的な仕切りにはならず、所々で多重なスケールを柔軟かつ効果的に扱う単元がみられ、そして地理的基本概念は様々に関連付けられ、主題的・系統地理的な内容のまとまり自体は重くみられている。一方、香港2010年版の場合は、地域規模で大きく仕切り、多重なスケールを変則的に繋げる環境拡大的構成を基に、その中で適合する主題的・系統地理的な内容のまとまりが配置され、それらに地理的基本概念に関連付けられ、その組織性の高いカリキュラムの

構成原理に従って、総体的にバランスが図られている。

さて第4表より、米スタンダードは、教科内容 (六つのエレメントとそれを構成する十八項目)、地理的スキル (五段階)、地理的パースペクティブ (以後、GP) の三つから構成されている。GP は、主となる空間的見方 (例: Where something occurs is ~) と生態学的見方 (例: How life forms interact with the physical enviroment is ~)、副となる歴史的見方と経済的見方から、地理的スキルと並んで説明されている。地理的基本概念に関わる内容は、エレメントとGP に概ね相当するが、吉田 (2011a) によれば、エレメントは内容知 (「場所と地域」「自然システム」「人文システム」「環境と社会」) と方法知 (「空間の世界」「地理の実用」) に分けられる。和田 (2004) によれば、このような米スタンダードは、地理学の五大テーマ (「位置 (位置と分布)」「場所」「場所内の人間と環境との関係 (人間と自然環境との相互依存関係)」「移動 (空間的相互依存作用)」「地域」) を示した地理教育ガイドライン (1984年) を具体化したものである。

中山 (2009) は、五大テーマが1992年に国際地理学連合「地理教育国際憲章」に採用され、国際的に認知

10 John Widdowson (2006, 2009) :*This is Geography1/2/3*, Hodder Education, London.

学年	2000年版のテーマ(I~VIII)と内容項目(①~⑯)		時数*	2006年版のテーマ(I~V)と内容項目(①~⑯)		時数*	
		特徴			特徴		
1	I 地理とは何か ・地理の概要 ① 人類の家、母なる地球	N G	1	●-----● <1> ●-----● <2>「自然」 ●-----● <3>「人文」 ●-----● <3>	I 地理とは何か ① 地理の概要 ② 人類の家、地球	N G	1 2
	II 景観 ② 景観：自然と人文 ③ 地図を通じた景観	◆□☆ ☆	4 6		II 環境への理解 ③ 自然的・人文的環境 ④ 地図を通じた環境 ⑤ 写真を通じた環境	** △☆ ☆	3 9 2
	III 自然景観の構成・導入 ④ 気象と気候 ⑤ 植生 ⑥ 水 ⑦ 岩石と土地形成	◆ □◇ □	7 6 7 7		III 自然環境 ・導入 ⑥ 地形と岩石 ⑦ 河川 ⑧ 気象と気候 ⑨ 植生	**◎◆ ◎ ◎◆ △△☆ △△☆ △☆ △☆	1 12 9 8 9
	IV 人文景観の構成・導入 ⑧ 人口と定住 ⑨ 食糧生産	◆N G	9 7		IV 人文的環境 ・導入 ⑩ 人口と定住 ⑪ 農業 ⑫ 移動と通信	**◎◆ ◎◆ ◎◆ N G △☆ N △☆ N △☆	1 8 8 8
2	V 変化する地表上の人間の 役割—肯定的な影響・導入 ⑩ 土地の埋め立て ⑪ 耕作可能な土地づくり ⑫ 結節と移動の増加	◆N G	9 5 3	●-----● <4>「変化」 ●-----● <4> ●-----● <4> ●-----● <4>	V 環境変化への対応 ・導入 ⑬ 土地供給 ⑭ 水資源 ⑮ 汚染 ⑯ 地球温暖化と オゾン層の破壊	**◎◆ ◎◆ ◎◆ N G ★ N ☆★ N ☆★ N G ☆★ G ★	1 8 8 8 8
	VI 変化する地表上の人間の 役割—否定的な影響 ⑬ 地球の病気の原因と徴候 ⑭ 汚染とごみ処理問題 ⑮ 地球環境の変化	G★ □G★ G★	3 7 7		VI 環境変化への対応 ・導入 ⑬ 土地供給 ⑭ 水資源 ⑮ 汚染 ⑯ 地球温暖化と オゾン層の破壊	**◎◆ ◎◆ ◎◆ N G ★ N ☆★ N ☆★ N G ☆★ G ★	1 8 8 8 8
	VII 資源・導入 ⑯ 資源の種類 ⑰ 技術と資源利用の変化	N ◆N★	3 7		VIII 私たちの生きる地球 ⑱ 資源の保護 ⑲ 地理的な洞察力	◆N G	9 1
	VIII 私たちの生きる地球 ⑱ 資源の保護 ⑲ 地理的な洞察力	◆N G	9 1				

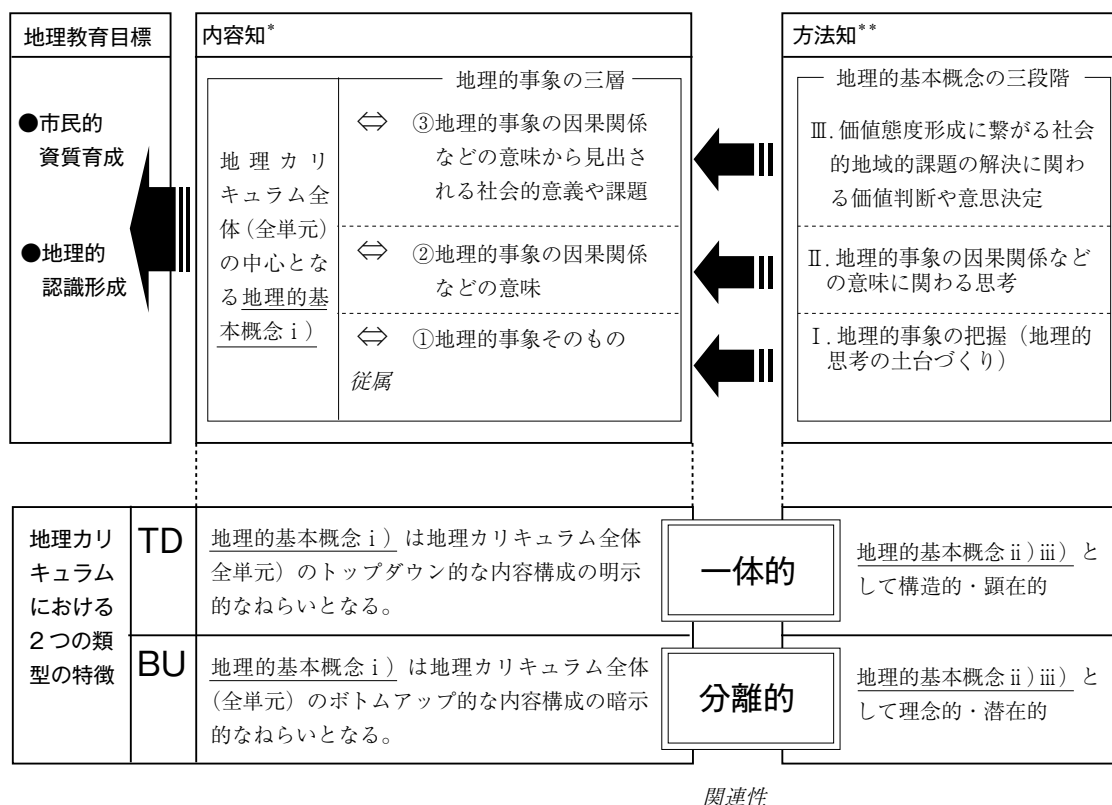
- ：2000年版と2006年版の間の破線の繋がりは主な対応関係と内容のまとめり (<1> ~ <4>) を示す。
- * 年間授業時数の最低 (1時間 35分、授業日年間 40週)：2000年版 1学年 54、2学年 54。2006年版 1学年 56、2学年 58。
- ** 普通 (探究) コースで一部の内容が省略される単元。
- ◎：事例学習が明確に指示されている単元 (◆か◇に対応)。
- ◆：シンガポールの事例や例証が見取れる単元。
- ◇：アジア・アフリカの事例や例証が見取れる単元。
- ：世界の諸地域の事例や例証が見取れる単元。
- N：NCに繋がる国家的課題に関わる内容。
- G：GCに繋がる地球的課題に関わる内容。
- △：具体的作業技能 (地図やデータなど、~利用する、描く、記述する、説明するなど)。
- ☆：地理的認識の探究過程 (調べる、対比する、分類する、解釈する、評価する、意見交換するなど)。
- ★：価値判断過程 (問題を認識する、手段を選ぶ、評価する、正しく判断する、行動するなど)。

第3図 シンガポール中学校低学年地理シラバスの特徴と変容—吉田 (2010) より—

第5表 中学校段階の地理カリキュラムにみられる地理基本概念に関わる内容の比較 (筆者作成)

段階*	香港2010年版	英2007年版	米スタンダード 1994年版	シンガポール 2006年版	平成20 (2008) 年版
I	○空間 ○場所	○場所 ○空間 ○スケール	○空間の世界 ○場所と地域	○地理とは何か ○環境への理解	○空間
II	○人間環境の相互作用 ○地域	○場所の相互依存 ○自然的・人文的プロセス	○自然システム ○人文システム	○自然的環境 ○人文的環境	○環境 ○地域 ○景観 ○分布 ○立地
III	○地球的相互依存関係 ○持続発展	○環境の相互作用と持続可能な開発 ○文化の理解と多様性	○環境と社会 ○地理の実用	○環境変化への 対応	○地域 (課題 / 未来)

* 吉田 (2012) による「地理的基本概念の三段階」との対応



* 地理カリキュラム全体(全単元)の内容構成レベルにおいて中心となり、地理的事象の三層(①②③)を従属させる地理的基本概念に関する知識理解の内容。このような役割を担う地理的基本概念を、地理的基本概念 i)と示す。

** 内容知(地理的事象の三層)を捉え考えるために、規範となる地理的基本概念の概念的知識を活用する手続き的な役割を担う「地理的基本概念の三段階」の内容。地理カリキュラム全体(全単元)の内容構成レベルで大局的にその役割を担う地理的基本概念 ii)と、単元構成や授業展開レベルでその役割を担う地理的基本概念 iii)に分けて示す。

第4図 内容知と方法知における地理的基本概念の役割からみる地理カリキュラムにおける2つの類型(TD型とBU型)(筆者作成)

されたことや、我が国の学習指導要領地理の見方・考え方との共通点を指摘している。このことから、米スタンダードも国際的な影響力を持ち、我が国を含めて世界的にその影響が見込まれる。具体的には、吉田(2012)でも指摘されたが、香港2010年版に米スタンダードと同じGPや、五大テーマとエレメントに類似する地理的基本概念が初出したこと、英2007年版に地理的基本概念が初出したこと、平成10年版の地理の見方・考え方に「空間」に関する記述¹¹が初出したことなどがあげられる。ただし、米スタンダードの中学校段階にスケールに関する構成上の配慮は強く読み取れず、学習対象の多くは国内が中心となり、また和田(2004)が紹介する米スタンダードを踏まえた教材においても全米が動態地誌的に取り上げられ、香港のような環境

拡大的構成は強く意図されていない。

シンガ2006年版の場合は、吉田(2010)によると、前の2000年版において地理的基本概念は不揃いであったが、「環境」によって全単元が一貫する内容構成に変化させている(第3図を参照)。主題的・系統地理的な内容構成で連なり、後半部の各単元末には、自国の事例学習が組み込まれ、冒頭の単元「環境への理解」は、香港1998年版の冒頭単元や米スタンダード「空間の世界」などと同様に全単元の内容構成レベルの方法知とみなせるが、米スタンダードや香港2010年版のGPのような方法知はみられない。また、英2007年版や米スタンダードのような複数の地理的基本概念は主立ってみられず、「環境」のみを通じて下位の様々な概念的知識を従属させるかたちをとる。

11 「地域の諸事象を位置や空間的な広がりとかかわり度とらえること」と示されている。

このようなシンガ2006年版や、平成10年版の特徴、また英1999年版から英2007年版への変容、そしてその影響を受けた香港1998年版から香港2010年版への変容などには、総じて、地理的基本概念、GP、単元内容などに関わる「米スタンダードの波及」が考えられる。

4. 総合的な検討——地理的基本概念からみる2つの類型——

我が国の平成20年版は、地域規模を規範にして地誌的に大きく内容が構成されているが、内容知となる地理カリキュラム全体（全単元）の中心に関連付く抽象度の高い地理的基本概念を明確に読み取ることは難しい。その真相の解明は、詳細な分析を要するため、別稿に引き継ぐことにする。一方で、本稿の冒頭で示した平成20年版における地理的基本概念は、目標の解説部分にある授業展開上の方法知となる地理の見方・考え方の文脈から導き出したものである。

第5表は、「地理的基本概念の三段階」と各地理カリキュラムにおける地理的基本概念の対応を示し、本稿で検討した香港2010年版と英2007年版に、吉田（2010、2011a）で検討された米スタンダードやシンガ2006年版の地理的基本概念に関わる全単元内容を並べ¹²、さらに我が国の目標の解説部分から導き出した地理的基本概念を便宜的に加えて比較するためのものである。検討すると、全て「米スタンダードの波及」とは言い切れないが、Ⅰ段階は主に「空間」「場所」が、Ⅱ段階は「自然と人文」「地域」などが、Ⅲ段階は「環境と持続発展」「相互依存」などが共通にみられる。その中でも米英は近似し、シンガ2006年版は米スタンダードが簡易化されたような構成をとり、英2007年版の影響を受ける香港2010年版ではあるが、Ⅱ段階で「地域」がみられる点で我が国と共通する。

米スタンダードは、エレメントを中心に全単元が十八項目によって構成され、英2007年版も地理的基本概念を前面に学習内容が細かく示されている。このような米英の地理的基本概念に関わる内容の特徴をモデ

ル化すると、地理学を中心概念に基づき、地理的事象の因果関係などの意味を理解させることを通して、様々な地理的事象そのものを理解させていく、いわば概念的知識の理解を中心にしたトップダウンな枠組みとみなせる（以後、TD型の特徴）。その特徴下では、学習内容を結び付ける構造的な規範が示され、授業経営において合理的に扱いやすく、明示的に地理的基本概念が結び付けられた単元内容によって学ばせられる¹³。

一方、香港2010年版は1998年版と同様に、地域的課題を様々な地域規模に組み込む環境拡大的構成をとるが、新たに示された地理的基本概念やGPは、暗示的・理念的に示されるだけに留まる。また我が国の平成20年版の場合は、地理の見方・考え方の内容に地理的基本概念が含まれるが、単元内容と分離して理念的に示される。アジアのこれらには「米スタンダードの波及」が認められるが、そのような理念的な部分の特徴に着目してモデル化すると、個々の知識、つまり地理的事象そのものの理解を重視し、時間をかけて地理的事象の因果関係などの意味に気付かせ、分かせようとする、いわばボトムアップ的な教育観の基で、教えるべき内容が比較的自由に様々な扱えるものとみなせる（以後、BU型の特徴）。

このようなTD型とBU型の特徴を踏まえ、冒頭の内容知と方法知の枠組みに基づき、総体的に検討すると、第4図のように考えられる。

第4図の上部は、内容知を方法知から学び、カリキュラム目標に到達する図式となり、内容知となる地理的基本概念 i) は、主に地理的認識形成に関わる①②や、主に市民的資質の育成に関わる③を高次にまとめ上げて説明できる抽象度の高い概念的知識となり、地理カリキュラム全体（全単元）の内容構成の中心的な役割を担う。一方、方法知となる地理的基本概念は、「地理的基本概念の三段階」からなり、内容知の理解のために、地理的事象を捉え考える際に、規範となる地理的基本概念の概念的知識を活用する手続き的な役割を担う。ただし、地理カリキュラム全体（全単元）の内容構成レベルにおいてその役割を担う地理的基本概念 ii)

12 前掲3の Geography Education Standards Project (ed.) (1994) において、その前段 (pp.31-32) に、「空間」と「場所」が特筆され、その内容の基に「空間の世界」と「場所と地域」を、「地理的基本概念の三段階」のⅠに位置付けた。また「環境と社会」の内容は社会問題に関わり、「地理の実用」の内容は価値態度に関わるため、「地理的基本概念の三段階」のⅢに位置付けた。

13 例えば、次に示す全米各州を五大テーマを通して理解させる中学校地理教師用の教材書は、五大テーマ自体の理解と学習対象を五大テーマを中心に理解させるものである。Ted Henson (1997) : *Geography of United States-Teaching the Five Themes*-. Instructional Fair · TS Denison Grand Rapids, Michigan.

と、各単元などを想定した授業展開レベルにおいてその役割を担う地理的基本概念iii)の両文脈に分けて捉えられる。また第4図の下部は、TD型とBU型における地理的基本概念i)としての特徴、地理的基本概念ii) iii)としての特徴、そして双方の関連性を示す。

TD型の特徴は、内容知となる地理カリキュラム全体(全単元)の内容構成において明示的なねらいとなり、そのトップダウンによって、下位の地理的事象とその意味が構成され、主題的・系統地理的な内容のまとまり自体も重くみられるため、様々な地域規模で仕切る環境拡大的構成の枠組みを一律的に意図しない。方法知には、米スタンダードの二つのエレメントやGPのように、内容知に繋がって構造的・顕在的に示される。また英2007年版のように、地理的基本概念に内容知に方法知が加わって融合され、双方の知が概ね一体的に扱われる。

BU型の特徴は、地理カリキュラム全体(全単元)の内容構成の中心に地理的基本概念を明示的におくよりも、様々な地域規模で大きく仕切る環境拡大的構成の枠組みを中心的な規範にし、その中で内容知となる地理的事象の知識理解からボトムアップ的に潜在的な地理的基本概念の理解に迫る。方法知では、我が国の地理の見方・考え方や、香港2007年版の説明の無いGPのように、方法知となる地理的基本概念の概念的知識が内容知と分離的に扱われ、その具体的な活用性よりも、各単元などの内容のまとまりを想定して理念的・潜在的に示される。

以上のTD型とBU型の検討に付随して、我が国の地理の見方・考え方や内容知と方法知の議論における新たな知見は、以下のように見いだされる。

吉田(2011a)によれば、五大テーマは米スタンダードの四つのエレメントも加え、内容知となる全単元の内容構成上の中心概念となる。残る二つのエレメントは、シンガ2006年版「環境への理解」とともに方法知として内容構成上の中心概念となる。このことを踏まえると、従来、方法知にみなされることの多かった我が国の地理の見方・考え方は、澁澤(1994)や中山(2009)等によって米スタンダードの土台となった五大テーマに相当するとみなされてきたが、これまで十分に着目されてこなかった米スタンダードのGPの方が、むしろ方法知として、「空間」「生態(あるいは環境)」などの地理的基本概念の概念的知識を活用する手続き

的知識となり、地理の見方・考え方に相当すると考えられる。

また、「地理的基本概念=地理カリキュラム全体(全単元)の内容構成上の中心概念=内容知となる地理的基本概念i)か、方法知となる地理的基本概念ii)」あるいは「地理的基本概念=各単元などの内容のまとまりを想定した授業展開上の地理の見方・考え方=方法知となる地理的基本概念iii)」といった識別によって、地理的基本概念の役割は見分けられる。これに従い、本稿で取り上げた各国地理カリキュラムをやや細かくみると、五大テーマは地理的基本概念i)、米スタンダードのエレメントとシンガ2006年版は地理的基本概念i)とii)の連結型、米スタンダードと香港2010年版のGPは地理的基本概念iii)、英2007年版は地理的基本概念i)とiii)の一体型、香港2010年版と我が国は地理的基本概念i)とiii)の分離型となる。このような識別の方法は、大枠としてのTD型とBU型の特徴に照らしながら、地理カリキュラムや地理学習における内容知や方法知を吟味するための有力な分析ツールに成り得る。

さらに、地理的基本概念iii)となる我が国の地理の見方・考え方の議論の多くは、従来の地誌的な学習の枠組みが重視されてきた経緯もあり、地理的基本概念i) ii) iii)の混在や同一視の基になされ、とくに地理的基本概念i)とii)の役割について十分に掘り下げて議論されてこなかったと指摘できる。この点の議論の深化は、例えば、地誌的、主題的、系統地理的といったアプローチの差異は問わず、地理的基本概念の役割の明確化に伴って、地理の見方・考え方の用語を不要とする方向に進んだ場合、我が国の地理教育研究において、地理カリキュラムや地理学習のパラダイム転換をもたらす可能性を秘めている。

5. むすび

岩田(2006)による米英のグローバルスタンダード化の指摘や、米スタンダードの国際的な認知度を考えると、我が国においても香港の変容やTD型の特徴などを参考に、明示的で構造的な地理的基本概念を内容知と方法知に示す方向の検討が必要となろう。それと同時に我が国の独自性を追究する議論もできる。

例えば、平成20年版の地誌的な学習によって地域規

模で大きく仕切る馴染みのある内容構成に戻ったわけであるが、平成10年版では地域規模に応じた調査の学習に関わる授業展開上の規範が複雑となり、それが上手く伝わらなかった恐れがある。いずれにしても地理的基本概念の理念的な埋没は、具体的かつ系統的な地理的見方・考え方の育成を不明瞭にさせてしまう。他方で、授業展開上の課題に、大杉(2002)による地理的見方・考え方によって認識の広がりだけが保障されるとの見方もあるが、例えば、内容知となる地理的基本概念(i)に基づき、質的な深まりが求められる地理的事象を用意すれば、学習経験の蓄積を通して、方法知となる地理的基本概念の活用も高度化していくはずであり、その結果、深い地理的認識が形成されていく。

重要な点は、内容知と方法知における地理的基本概念の明確化とその授業構成の組織性を高めることにある。双方の知のバランスに配慮する必要もあるが、それによって広くみれば、我が国の教育方法的な課題となる習得・活用・探究の過程や、あるいは概念的知識の獲得の促進にも繋がる。

最後に前章でも指摘したが、地理カリキュラムにおける地理的基本概念の役割に関する議論の深化は、地理カリキュラムや地理学習のパラダイム転換をもたらす可能性のある重要な課題であり、社会科教育との議論や、「米スタンダードの波及」が広く見込まれる諸外国の地理カリキュラムの動向も踏まえながら、その検討を急いで進めていく必要がある。

参考文献

- 岩田一彦(2006)：新しい社会認識教育実践のための行動計画—何をどう変えるか—。社会認識教育学会編『社会認識教育の構造改革—ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発—』明治図書、pp.309-315。
- 草原和博(2006)：地理教育の社会化—わが国の地理教育変革論の体系と課題—。社会系教科教育学研究、第18号、pp.1-10。
- 中山修一(2009)：地理教育国際憲章。中村・高橋・谷内・犬井編『地理教育の目的と役割』古今書院、pp.212-214。
- 大杉昭英(2002)：中学校社会科における「見方や考え方」の検討—地理的分野と公民的分野の比較を通して—。社会系教科教育学研究、第14号、pp.87-94。
- 澁澤文隆(1994)：地理授業の改善の方向と課題。澁澤文隆編『新高校地理授業の工夫とアイデア』古今書院、pp.7-47。
- 和田文雄(2004)：米国ナショナル・スタンダードの実践教材としての ARGUS 教材—ジオグラフィカル・スキルの習得をめざすアクティビティに焦点を当てて—。地理科学、59(3)、pp.140-148。
- 吉田 剛(2010)：シンガポール中学校低学年地理科シラバスにおけるナショナルシティズンシップ育成。社会系教科教育学研究、22、pp.41-50。
- 吉田 剛(2011a)：社会科地理的分野における地理的見方・考え方と地理的技能の枠組み—内容知と方法知の視点から—。新地理、59(2)、pp.13-32。
- 吉田 剛(2011b)：中等地理教育における能力・技能の方向—地理的基本概念と探究過程の課題—。地理、56、pp.29-34。
- 吉田 剛(2012)：香港中学校地理カリキュラム2010年版の枠組み。宮城教育大学紀要、第46巻、pp.45-60。

付 記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)：課題番号22530949「華人系アジア型地理カリキュラムに関する比較研究」(2010～2012年度)の成果の一部である。また、2011年度の東北地理学会(秋季大会10月)と社会系教科教育学会(2012年2月)の各大会にて発表した内容の一部に、加筆・修正したものである。

(平成24年9月28日受理)